
雪の花と白銀の刃

ケイロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の花と白銀の刃

【Nコード】

N6084Z

【作者名】

ケイロン

【あらすじ】

人々は怪物に攻められ、戦争が起きた。大地は汚染され、人々は『半地下都市』で暮らすこととなった。ディープルに対抗する『力』を人々は手に入れた。大切な人を失い『力』を手に入れた少年、雪平誠はこの世界で何を見るのだろうか。

主人公は最強にする予定ですが、少し苦戦する程度になると思います。

プロローグ ある哀しい男の夢 (前書き)

プロローグですのでかなり意味不明な感じになってしまいました。

プロローグ ある哀しい男の夢

遠い遠い雪国の夢を見ていた。

「さん、そんな所で寝ていると風邪をひきますよ。」

黒髪が腰に届くほどある周りの雪の様な驚くほどの白さの肌をした少女が目の前にいた。

「ん？ああ、すまない。おはよう、ゆきか雪香。」
声から察するに俺は男みたいだ。

「おはよう、じゃないですよ。こんなに雪が積もって。」

そう言っただけで彼女 雪香 は俺の頭の雪を払った。俺はだれなんだ？ここはどこなんだ？そんな俺の疑問を無視して進んで行く。

辺りを見渡すと一面真っ白だが、かなり広い庭園みたいだ、そして今俺は縁側の様なところで脚を投げ出して寝転がっていた。

「それではさん、私は少し出掛けきますね。」

・・・ダメだ、ダメだ、行ってはいけない。

「んじゃあ、俺はのんびり過ごすよ。」

なぜかそう思ったが、俺の身体は笑顔で彼女を送り出していた。なんでそう思うんだ？でも、後悔する。そんな気がする。絶対に止めないと。

・・・行くな！行ったら。。。

プロローグ ある哀しい男の夢 (後書き)

不定期投稿になりますがよろしくお願ひします。

喪失と力（前書き）

後もう少しで戦闘場面になる予定です。感想、疑問点があればコメントください。

喪失と力

辺りには血だまりと赤黒くなった『人』だったものが散らばっていた。

「何だよ… 何なんだよ！」

周りで起こったことを認めたくなくて俺は叫んでいた。目の前にはねじ曲がった角、毛が筋肉質な身体を覆っていた。目は獰猛に光り、大きな爪のついた手から血を滴らせていた。

『ディール』

ソイツは人々からそう呼ばれていた。

ディールは、突如現れたわけではない。昔から人々の暮らしの隙間の闇に潜んでいた。東洋の国では妖怪やアヤカシと呼ばれるものだ。

だが、ディールもその頃は、それほど強大ではなく、闇にひっそりと隠れていた。

しかし、何のためにか人類に攻撃を仕掛けてきた。2020年に始まった戦争は、10年にも及び、辛くも人類の勝利だった。その一方で、戦うすべの無いものは殺され、人口は、世界で最も多かつたときの六割となってしまうた。

地上はディールが

徘徊し、大地の大半は汚染され地下で暮らす人々がふえていった。

『半地下学園都市エデン』あらゆる学校が集合し、形成された地下都市の一つである。しかし、全ての住民が学生のわけではなく、卒業してもそのまま残る人がほとんどである。

俺、雪平誠ゆまひらまこともこの都市の第二普通科学校に通っている。今日は日曜日で両親と買い物をしていた。男子の友人と途中で会い楽しく買い物をしてきた。さっきまでは。

「父さん、母さん、みんな？」

誠の呼び掛けに答える者は誰一人いない。

「Uooooooooo！」

目の前の化物が口から血肉を飛ばしながら雄叫びをあげた。むせ返すような血生臭さだ。

「・・・何だよ・・・お前は・・・お前はあぁっ！ 殺す！ 殺す殺す殺す！」

誠の身体から美しくも鋭い光で覆われていた。

「こちら、ディープル対策本部総司令官神有だ。つい先程少年がギガス型ディープルを撃破したところを目撃した。そうだ、ユニークと断定できるだろう。少年は現在気を失っており、このまま本部に搬送しようと思う。ああその通りだアリス。この少年がいい戦力になることを願おう。」

本部の副司令官アリスとの電話を終えた神有美月は少年の頬を撫でた。
かみありみつぎ

「全く、どうしたらこんな風に殺せるの。あなたはもしかして英雄？それとも救世主？」

身体中を氷漬けになったギガスを見、そう呟いた。

「もしもし榛名？」

「うん、何、兄さん？」

誠は携帯で妹の雪平榛名ゆきひらほるなに電話をかけていた。

「いや、あのさ、これから家に帰ろうと思うんだけど帰ったら大事な話をする。」

「大事な話？・・・うん、わかった。何の話かわからないけどかなり大事なんだね。」

妹はまだディープルが入り込んでいたことを知らないようだ。妹とは、血が繋がっていないが、お互いの事は信頼していた。

「それじゃあ切るからね。」

「うん。」

誠は深いため息をつき、家に向かって歩き始めた。

その後、誠は対策本部に搬送され目を覚まし、自分にディープルを倒すための『力』があることを知らされ、対策室に入隊することになった。妹に会って両親たちが殺されたことを話すため一時的に対策室から出てきていた。

「普通は一般人に対策室のことを詳しく話すのは禁じられているんだけどな。」誠は家の前で独り言を呟っていた。

「ただいま」ドアを力なさげに開け、目の前に榛名がいることに気付いた。

「お帰り・・・」誠と一緒に両親たちがいないことに気づき、自然と兄が言いたいことを察した。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

二人ともなにも言わず居間にあるソファーに向かい合って座った。

「・・・・・・・・父さんと母さんは・・・さつきディープルに殺された」

「・・・・・・・・っっ！」榛名は予想はしていたがディープルの単語が出た瞬間、榛名の身体は強張った。

「何で？何で！対策室の人たちがディープルから私たちを守っているんじゃないの！」榛名は兄に聞いても意味がないことを分かっているが兄に怒鳴って尋ねた。

「・・・・・・・・討伐漏れだそうだ。」

「・・・・・・・・討伐漏れ？」兄から答えが帰ってくるとは思っていないかった榛名はさつきまでの怒りより驚きがうわまった。

「それ、どういうことなの？何で兄さんが知っているの？」

ああ、そう言うことか、兄は『力』を手に入れたんだ。だから今生きて目の前にいるんだ。

榛名は兄が対策室に入ることを悟った。

「俺は『力』に目覚めた、だからディープル対策室に入ろうと思う。そして俺達の様なやつをつくらないために頑張りたい。」

兄は確固たる決意を宿した目で自分の意思を話した。

「……わかった。兄さん、これから言うことを約束して。」榛名は兄とずっと離れたくない気持ちを無理矢理押し殺し、口を開いた。

「絶対に死なないで。絶対に……」

途中から涙がこみ上げて来て兄に抱きついた。

「死なないで。絶対に……」

誠は涙に濡れ崩れても綺麗な顔立ちの妹を優しく抱き締めた。

「ああ、俺は絶対に死なない。」

「……」

「……」

どのくらい経ったかわからないが涙が収まった妹を抱き締めるのを止めた。

「……もう一つ約束して。」

「ん？何だ？」

「暇なときでいいから連絡をして。」

「わかった。なるべくするよ。」

この後、誠たちは夜遅くまで今までとこれからを話し合った。

「兄さん、それじゃあちゃんと約束守ってね。」

「勿論だ。俺がいままで榛名とした約束を破ったことがあったか？」

二人とも昨日で両親たちが死んだことに吹っ切れ、笑顔で別れの言葉を言っていた。

「そろそろいい？もう時間なんだけど。」

美月是对策室のロゴがはいった車の助手席から顔を出し、二人のやり取りを微笑ましく見ながら告げた。

「すみません、神有司令。」

誠は笑顔のまま答えた。そのまま車の後部座席に乗り込みドアを

閉めた。

「ちゃんと約束守ってね〜！」

手を振る様名に窓から手を振り返し、窓を閉めた。

「かわいい妹さんじゃない。」

「ええ、自慢できます。でも俺がいない間の悪い虫が付かないか心配ですよ。」

「それは大丈夫じゃない。」美月は、意味深な笑みを浮かべた。
「？」

そんな事を美月が思っているなんてわからず首を捻っていた。

ブロロロ…キィ！車が半地下都市の『天井』と言える場所まで登り、『ダブル対策本部』とかかれたかなりデカイ建物の前で止まった。

「ようこそダブル対策本部へ！…ていつても昨日ここに搬送されたんだよね。」

「いえ、昨日は頭が混乱していてよく覚えていませんでしたから。」

誠はこの建物の大きさに驚きながら答えた。

車から降り、筋肉がよく付き、体格の良い門番二人の間をとおり、建物の中に入り対策室の説明を廊下を歩きながらした。

「まず対策室は世界中にありこの対策室はそのなかでも、最も規模が大きいものの一つよ。まあここはユーリア大陸の対策室の本部だしね。」

「でも何で学園都市のここが本部なんですか？普通、本部とかって大人が多くいるところになりそうな気がするのですが。」

「そうね、他のオーリア大陸、ノーアメリ大陸なども大人が多いところが本部なのは事実。でも学生だから弱いというわけではないの、それに危険を犯してまで守りたいものがある人は大人も子供も関係なく強い。」

誠は十六才である自分より少し年上の筈なのにその言葉はひどく

大人に聞こえた。

「さて、もう着いたわ。」

少し大きめの扉の前で止まり、準備はいい？という視線を美月は誠に合わせ、扉を開けた。

出会いと戦闘準備（前書き）

感想、疑問点があればコメントください。

出会いと戦闘準備

ガヤガヤとしていたが美月が入ってきたことで静かになった。この部屋はかなり大きい講堂のようだった。その講堂の中にぎゅうぎゅうとまではいかないが、かなりの人がいた。

「急に集まってもらってすまない。これから新しくこの対策室に入ることになった雪平君を紹介しよう。」目でほら早くと促されたにしても大半が『女子』なのはなんでなんだ？男女比が2：8だぞ・・・まあいいや。

「えー、雪平誠です。空から降る雪に平らの平に誠実の誠です。えーと、誕生日5月5日で一昨日十六になったばかりです。えー、これからよろしくお願いします。」

かなりの人に注目され、緊張しっぱなしだ。

「これから雪平君は我らの仲間となったのだ、彼の面倒を見てくれ・・・わかった、わかった、それでは質問タイムだ。」隊員の

主に女子 視線に負け美月は誠に後始末を任せた。

「雪平君。ううん、誠君ってよんでいい？」

「キヤー！やっと私好みのイケメンが入ったわ！」

「彼女は、彼女はいるの？」

「好みの女性は？年上なんてどう？私十八なんだけど。」

「あ、いや、あの、その」

「一気に尋ねられしどろもどろとしていると、

「ええい！黙れ！誠が困っているだろ！」

髪が金髪でツンツンした男子が叫んでいた。

「うるさいわね！金髪は黙ってなさい！」

「そうよ！たくわんはおとなしくしていればいいの！」

「いつつもいつつもうるさいの！たくわん！」その男子は壮絶なブーイングにあっていたが次第に収まり、金髪男子は誠に言った。

「俺はレオン、レオナルド・シュタイン。西の方の出身だ。よろ

しく誠。」

手を出して握手を求めてきた。

「ああ、よろしくレオン。」

握手をしながら答えた。

「ハイハイ。それじゃあ私の質問からね。」

いつの間にか質問する順番をきめていたようだ。

「その髪の一部が白っぽい染めたの？」

やっぱりそのことを聞かれたか。

「いや、違うよ。『力』に目覚めて使用した時になったんだ。も

う一度使うと全部真っ白になるらしい。」

そう、白というよりは銀に俺の髪はなっていた。

「それじゃあ次はー、彼女さんはいるの？」

・・・はあ

「いままでモテたためしがないから、できたことがない。」

実際、付き合った人は皆無だ。まったく、バレンタインで義理手

ヨコは大量に貰うのに。義理だからか？義理だからなのか？

「えー！ウソー？そんなモデルばりにカッコいいのに。・・・私

が頂こうかしら。」

最後に何かボソツと言っていたが。まあいいや。

「それを言うなら、君こそかわいいんだから、彼氏とかいるんで

しょ？」

事実、結構ここにいる人は美少女率が高い気がする。

「かつ！かわいいなんて！・・・ボンツ」

・・・名前の知らない女の子が顔を真っ赤にして倒れてしまった。

何か俺変なことしたっけ？

「それでは雪平君には第一小隊に入ってもらおう。凜華、よろしく
たのんだぞ。」美月は先程の騒ぎが収まった後、俺の所属先を話し
ていた。

「雪平様、わたくしは、第一小隊長神有凜華かみありんかです。神有司令の妹

です。よろしくおねがいます。」ストレートの髪はポニーテールになっていて、美月と同じ青色の髪は腰に届くほどの長さだ。顔は色白でどこかのお嬢様のような目が鋭いとまではいかないけど、意思の強さを感じる。

「ああ、よろしく俺のことは誠って呼んでくれない？そっちのほう慣れてるから。」

「わかりました、誠様。」

・・・なんで『様』がつくんだ？

考えていると突然

「よつす、誠。」

レオンが話し掛けてきた。

「レオンも第一小隊なのか？」

「そうだ、ちなみにさつきお前が陥落させたリリアともう一人が第一小隊だ。」

さつき？陥落？何言っているんだ？

「あ、あの誠君、私、リリア、よろしくね。」

さつき俺に質問をしていて倒れた娘だ。まだ少し顔が赤い。

「よろしく、リリア」

リリアは茶色っぽいセミロングの髪型で少し活発な感じだが、品のある顔立ちをしている。それから少しリリアと話し、打ち解けてきたとろでもう一人がきた。

「・・・真奈、私の名前はひじりまな聖真奈。」

小柄な体格で顔は無表情だが整った人形のような可愛らしさがある。髪は銀髪で足の付け根ぐらいまでの長さだ。

「ああ、これからよろしく。」

コクッ

真奈が軽く頷いた。

「真奈が自分から話し掛けるなんてめずらしいね。」

コクッ

リリアが尋ねたが誰にでもそうらしい。

『ビービービー、ディール出現、地上エリア第三区にて
応戦せよ。第一小隊出撃準備。ディール出現、第一小隊出撃準備。』

誠たちは趣味など他愛のない話をしていたが突然の警報に誠は驚いた。

「これ何なの？ディール出現って。」

「ディールがエデンに近付いて来たということです。」
凜華が丁寧に答えた。

「ああ、それに俺ら第一小隊が出撃みたいだな。」

レオンたちは話しながら講堂を出て第一小隊室に入った。

「ほらよっ。」

レオンは誠に黒い服を渡した。

「それは小隊ごとに渡される戦闘服だ。」

なるほど、これを着て戦うんだな。背中の部分に『？』と銀色で書いてあった。

「その『？』っていうのは、第一小隊だということを表しているんだ。まあ言わなくてもわかるだろうが他の隊も、それぞれ番号が背中にある。」

第何小隊まであるだろう。

誠は下らないことを考えながら『服』を着ていた。

レオンは残念だと言っていたが男子と女子でカーテンで区切られている。

まあ、普通だよな。

戦闘服は身体にピッタリと合ったが、誠はディールと戦うことを考えており、そのことを疑問に思わなかった。

対策室は地下と地上が繋がっていて、ディールが汚染地区から出て来て、近くに来ると出撃し、殲滅する、ということをしている。都市は汚染されていない地区に作られている。ちなみに対策本

部であることは、隊員たちのためにあらゆる設備が整っていて、隊員は皆、対策室の中の寮で暮らしている。作りは1LDKらしく、ほとんどの隊員は食堂で食べているらしい。プール、体育館、ウエイトルーム、グラウンド、温泉まである。そして小隊ごとに小隊室が与えられていて、武器など様々な物を置ける。要するに学校の部屋みたいなものだな。

「ん？誠は、なんも武器もたないの？」

「？ああ、何か俺ユニークって言うやつらしい。珍しいの？」

そう、俺は『力』を使うことで武器を作れる。まあ俺はそれだけじゃないらしいが。

「当たり前だろ！『力』を手に入れる人は結構多いが、ユニークはその中で珍しいんだよ。」

「へえー。」

「・・・何で驚かないんだ？普通、他の人と違ったら、『俺は選ばれし者だ』って言う風になって威張るだろ？」

「いや、ユニークだからといって強いとは限らないだろ？それに強いからって威張って何にもならないしな。」

「・・・お前ってやつぱり珍しい奴だな。そんな事言えるなんて。」

「えっ？」

何か失礼なこと言われた気がする。

「まあ気にすんな。俺がもつとお前に惚れただけだ。」

「やめろっ！気持ち悪い。男に惚れられたくない。」

こいつは何なんだ、そっちの人なのか？

そういう事を話しながら地上エリア第三区の『扉』に着いた。

「第一小隊、出撃準備完了。いつでも行けます。」

凜華が戦闘服に付いている小型無線機で指示を待っている。

「今回はギガス型だ。数は五体。・・・それでは出撃！生きて帰ってこい！」

美月の声とともに扉を開け、誠たちは戦いに向かった。
今と明日を生きるために

出会いと戦闘準備（後書き）

次、戦闘場面になる予定です。

戦闘と白銀（前書き）

戦闘場面になりましたよ。でも自分の力ではうまく書けませんね。感想、疑問点等があればコメントください。

戦闘と白銀

青空が広がっていた。草の生えていない地面に誠たちは立ち、そんなに遠くないところにある汚染地区である『森』を見ていた。普通の森と違うのは黒い霧が、立ち込めていることだ。そして、体長は約3メートルで、ねじれた角を持ち、黒い毛の筋肉質な身体をしたギガスがいた。誠が倒したのとの違いは、手にそのまま引っこ抜いた様な大きな木を持っていることだ。

「それではまず、雪平君以外でギガスを倒してくれ。」

「了解しました。」

美月の指示に凜華が答えた。

「それでは、行きます！」

凜華が銃でギガスを牽制し、レオンが前に走りながら銃を五発連射した。

ディープルには『力』を供給した武器が有効である。そして、ユニークは『力』自体で武器を形成している。

ギガスは近付いて来たレオンに木を上から降り下ろした。レオンは左に余裕を持って避ける。

「・・・こつち。」ギユンツ。

真奈が手元から銀色の糸を出していた。

「真奈もユニークだったんだ。」

誠は驚き、目を見開いた。

「よしっ！そんじゃあ叩き潰すぜ。」

ギガスの背後に回っていたレオンは高く飛び上がり、手に作った巨大なハンマーを拘束されているギガス目掛けて、降り下ろした。

「グシャッ！」

ギガスの頭は跡形もなく潰れ、そのまま前のめりに倒れた。

「まさか、レオンもか！」

レオンもユニークだったことに驚きを誠は隠せなかった。

「リリア、次行きますよ。」

凜華がリリアに合図をし、二人は視線を合わせ、同時にユニークを発動した。

「もしかして、とか思ってたけどやっぱり皆ユニークなんだ。」

誠の呟きを無視し、凜華が手にもった弓を引き絞った。

「こつち見なさい。」

リリアがそう言いながら両手に一本ずつ持った剣を横尻ぎにギガスの脚を切り裂いた。

バランスを崩し膝をついたギガスの頭を限界まで引き絞られていた弓から放たれた光が貫いた。

「弱いですね。」

弓を引いたままの格好の凜華がギガスの死体を一瞥し、言った。

「どうだ、驚いただろ。この小隊は全員ユニークなんだ。」

レオンが誠に近付いて来て、いたずらが成功した子供のような顔で言った。

「ああ、びっくりしたよ。皆武器を持ってたから、わからなかった。でも、なんで？」

「お前も言ってただろ？ユニークだからといって強いとは限らない。だから足りない所をこれで補ってるんだ。」

銃を指でコツコツしながら言った。

「それでは次、雪平君、ソロでやってもらえる？」

「了解しました。」

ああ、やっと戦える。さっきから身体が熱い。俺は一体どうしたんだ？何か溜まっていて直ぐに弾けそうだ。

「さあ、行け。」

誠は三体いるうち手前のギガスにダッシュして接近した。

「俺の『力』よ、奴らを殺すための『力』よ。」

誠は走りながら叫び、右手を前方に出した。目を閉じる。体の奥から疼くような感覚がし、右手に体の熱が集まってくる。心地よい

重さを感じ、閉じていた目を開いた。現れたのは通常のより少し大きい刀である。握っていると腕が延長したように馴染んでくる。そして、鞘を抜いた。

真っ白だった。刀身は雪の如き白さ、そして、美しかった。

ギガスが木を真上から降り下ろすのを僅かに右に避け、その上に乗り、ギガスの肩までかけ登った。

「ハッ！」ブシャッ

誠は体をねじり、首を後ろから一閃した。凄まじい切れ味で首がもげ、血を吹き出して倒れていくのを尻目に見て、もう一体のギガスが振るって来た木を刀で防ぐ。

「フンッ！」

力を込めてはねあげ、懐に入りギガスを肩から斜めに深く袈裟斬りをした。

体に真っ赤な血を浴びても気にせず、最後の一体が横に振ったのを高く飛び上がり、そのまま落下して頭に刃を突き立てる。手にわずかな抵抗を感じたが鏢の所まで深々と刺さり、ギガスは沈黙した。

司令室で、白く、いや、銀色に輝く髪と血のような深い赤色の目をした誠を美月は見ていた。

「彼は何者なんです？」

アリスが隣で驚いた表情をして、聞いてきた。

「私にもわからない。しかし彼はあれでもまだ『力』を出しきれないようだ。」

「あれですか?!」

アリスは声を高くして聞いた。

「その通りだ。私が彼を見つけたとき、ギガスは、氷の花になっていた。いや、少し違うな。氷の花ではなく、氷の花が散った状態だった。」

「・・・散った状態？それは細かい肉片が凍り付いていたと言うことですか？」

「ああ。」

「でも、『力』はエネルギーで、ユニークはそれを武器に形成しているはずです。凍らせるなんて聞いた事ありませんよ。」
にわかには、信じられないという顔である。

それにしても、銀の髪に赤い目、あの伝承とそっくりではないか。

美月は、アリスの言葉を聞き流しながら考えていた。

それなら彼は英雄にも私達を滅ぼす者にもなる。
白い刀が扇のように舞っている様子を美月は見ていた。

「いやー、お前、強すぎじゃね？」

刀を鞘に戻し、消した誠は皆の所に戻って来ていた。

「・・・髪がせっかく銀になったのに汚れた。」

そう言いながらいつの間にか持ってきていた水の入ったバケツを真奈が誠は頭からかけた。

「ありがとう。それにしても俺も驚いたよ。自分があんな風に動けるのがさ。」

真奈に手渡されたタオルで頭を拭きながら答えた。

「お前は異常だよ。初めての戦闘でいくら下級とはいえ、ギガスを瞬殺するのかな。」

「ええ、あれほどにまで美しい舞は見たことがありませんよ。」
凜華が興奮した様子で誠を賞賛していた。

「うんうん、誠君はこれから扱き使われるね。」
リリアが笑顔で言った。

「ご苦労様、もう戻って来て良いわよ。」
美月が指示を出し、誠たちはお互いに誉め合いながら戦場をあとにした。

「腹へったぜ。早く食堂に行かね？」

小隊室に戻り、戦闘服を脱いでいるとレオンが、みんなに話しか

けてきた。

「食堂？そんなのあるの？」

まだ対策室の設備についてよく知らない誠は聞いた。

「うん。そして、食堂は無料で利用できるんだよ。」カーテンの向こうからリアの声が聞こえた。

それは驚きだ。

「あと、品揃えも結構ありますしね。」

着替えを終え、備え付けをソファに脚を揃えて座っていた凜華が付け足した。

「すごいな、それじゃあ早く行こう？なにも食べてなくてペコペコなんだよ。」

誠は情けない声を出してみんなに笑われながら誠たちは食堂へ歩いて行った。

戦闘と白銀（後書き）

次は対策室の設備についての話になりそうです。次も読んでくださるとありがたいです。

設備と質問（前書き）

設備の説明になる予定でしたが、あまり説明のなっていないません。投稿が遅れててしまいました。これからも不定期投稿になります。

設備と質問

食堂は結構小隊室に近かった。食べたい料理の券を券売機のようなもので選び、それを食堂をおばさんに渡して料理を貰う形式だった。ランチセットを選んだ誠は窓際にある五人掛けのテーブルに座った。先に来ていた凜華たちは誠が座った瞬間、食事を開始した。

「あ、誠君もランチセットにしたんだ。」
鯖の塩焼きを箸でつつきながらリアが聞いてきた。

「うん。それといって特定のものを食べたいわけじゃないし。」
ご飯を飲み込み答えた。

「それにしてもさ、誠、お前注目浴びすぎだな。」
パンをモグモグしながらレオンが誠の気に行っていることをいつてきた。

「なんでなんだろうな？」
「は？そりゃあ、入って来たばっかで小隊に入って、初の戦闘でデイーブルを一人で三体倒したんだから当たり前だな。」
レオンが何バカなこと言ってるんだという顔をしていた。

「小隊って入ったばっかで入れないの？」
誠はレオンの顔にムツとしながら聞いた。

「ええ。少なくとも小隊に入るには訓練でそれなりの成績を修めていないとなれません。」

凜華が箸をおき、誠の疑問に答えた。

「それなので必然的にユニークが多くなるのです。でも全員がユニークなのは、この小隊だけですけどね。」

「と言うことは凜華たちは成績優秀者なんだ。」
驚きだ、凜華やリア、真奈は優秀そうに見えるがレオンまでとは。
は。

「お前、今、失礼なこと思ってただろ。」
何！こいつ俺の心が読めるのか？！

「・・・顔に出てる。それに勉強じゃなくて戦闘の訓練の成績だから。」

「それもそうだな。」

「そんなことより、誠の髪が白になったのは、『力』の色だと思っただけで、その目はどうして赤なんだ？」

「そう、俺の髪は白　銀に近いが　になり、目がなぜか赤いままになっただけだ。」

「わかんないけど、別にいいんじゃない？見えないわけじゃないし。」

「誠は別に気にしている様子もなく答えた。」

「そういえば、俺ってまだ訓練に出なくても良いのかな？」

「それは大丈夫ですよ。戦闘の後は3日間お休みになりますから。」

「それはありがたい。まだ自分の部屋にすら行ってないのに訓練なんて始めたくなかったし。」

「ごちそうさま。」

「誠は一番早く食べ終わり席をたってこれからの自分の部屋を見に行った。」

寮は対策室の西側にある。『雪平誠』と書かれたプレートがついた部屋の前で誠はあらかじめ渡されていた鍵を使って開けた。

部屋には備え付けの柔らかそうなベッド、横になれそうな大きさのソファ、何も入っていない冷蔵庫があった。キッチンの扉の中には包丁や鍋、食器類などが十分揃っていた。

「すごいな・・・」

誠は想像していたよりも綺麗で広かった。その部屋の中央には誠が持ってきていた服を入れたカバンがあった。誠はカバンを開けを確認した。私服が数着しか入っていない。

「よし。ちゃんと入ってる。」

確認を済ませ、ベッドに寝転がり、右手を見ていた。

まだ手にギガスの肉を断った感触が残っている。デューブルも生きているんだな。

ピンポーン

考え事をしてっていると誰かが来た。扉を開けると真奈が立っていた。

「……………」

「……………」

「…………暇だから来た。」

「そ、そう。」

部屋に誰か来ると思ってたなかった誠は驚いて謎の間が空いてしまった。

「…………邪魔します。」

真奈はそういって、誠の脇を通ってポフツとベッドに座った。

クンクン

「…………誠の匂いがある。」

「は！えっ？なにしてんの！？」

ベッドで匂いを嗅いでいた。

「…………誠の匂いを嗅いでるの。」

はい、その通りです。

「いや、だからなんで？」

「…………ダメ？」

真奈は上目遣いで誠を見ていた。

「ダツ、ダメだから！」

真奈は渋々といった様子で匂いを嗅ぐのを止めた。

「えーと、真奈はなんで俺の部屋の場所知ってるの？」

まだ誠は誰にも話していないはずだ。

「…………隣が『雪平誠』って書かれた部屋だったから。」

ああ、だからか。

「隣だったんだ。よろしく。」

コクッ

「・・・そして、誠は対策室の中をよく知らないから、案内しようと思ってきた。」

まだ誠は来たばかりで、よく知らないので快くその申し出を受けなかった。真奈は無表情だが、どこか嬉しそうにした。

「・・・ここは訓練棟、体育館やウエイトルーム、地上に出るとグラウンドがあるの・・・他にもプールとか射撃場とか色々ある・・・普通の訓練は体育館とグラウンドが多い。」

誠の部屋から出た誠たちは北側にある訓練設備が集中した、訓練棟にまずは来ていた。

「グラウンドはやっぱり地上にあるんだ。」

半地下都市は地上で巨大な壁に囲まれた所があり、暮らしている人もいる。対策室はその周りを囲うように地上部分ができている。

「・・・明明後日の訓練はグラウンドになる予定。」

訓練棟からでて、今度は中心部にある司令室に来ていた。誠たちは訓練棟から出てすぐに美月に、

「あつ、雪平君、丁度良いこれから司令室に来てくれないか？少し話がある。真奈も一緒に。」

と呼ばれて司令室にいる。司令室は大きいディスプレイが壁についていて、エデン周辺の地図らしきものが映っていた。

「それでは雪平君、これから言う質問に答えてくれないか？」

「ええ、良いですよ。」

誠は何を聞かれるか、気になっていた。しかし隣で真奈が無表情ながらも苦い表情になった。

「それではまず、これまでになにか戦闘訓練受けたこともしくは格闘を学んだことはある？」

「いえ、全く。」

初等部と中等部では水泳部に入っていた。

「では次、初めて『力』を使ったことは、あのと看以前にある？」

あのととき。両親と友達が殺されたときだ。

誠の顔が一瞬かげった。

「ないと思います。」

『力』を使うとき、まだ慣れない感じと、なぜか懐かしい感じが誠はしていた。

「次ね、これは質問とはちょっと違うけど、あなたの『力』の量を測ったらものすごく多かったのだけど、心当たりはある？」

「どうということなんだろう。」

「『力』の量が多いというのはどうということですか？」

「気になり、質問を質問で返してしまった。」

「そうだったわ。まだ、雪平君には詳しく『力』を説明をしてなかったわね。」

美月は少ししばつの悪そうな顔をして言った。

「それじゃ、『力』と、『力』と関係が深いディープルの話をしようかしら。」

設備と質問（後書き）

次も読んでくださるとありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6084z/>

雪の花と白銀の刃

2011年12月29日16時53分発行